2023年5月

課題本 『式子内親王伝　面影びとは法然』

石丸　晶子/著　　朝日新聞社　　１９８９年

◆◆◆5月の読書会から

5月も先月にみんなで読んだ『ニホン語日記』の感想の振り返りから始まりました。本の題名が『日本語日記』ではなく『ニホン語日記』となっているのはゆれる日本語、変化していく日本語のあいまいさを表しているのでは…という意見が出ました。読書会の他の参加者からは「あいまいさを受け入れていくことは悪くはないが、常にそうであることは怖いことではないか、自分の中に基礎、基本がないと駄目なのではないか」という意見も出ました。私たちが日頃使っている日本語について身近過ぎてじっくり考えることも少ないかもしれませんが、課題本をきっかけに「変化する日本語」に違和感を覚えたことなども振り返りを通して参加者で共有できました。

今月の課題本は登場人物が多く、参考文献もたくさんあり膨大な情報と著者の考察、感情が盛り込まれており、「読みにくかった」「難しかった」という声も聞こえましたが、ここは読書会。課題本を存分に楽しんだ人もいて、人の感想を聞くと「面白そう」と思えてくるのが読書会の醍醐味ですね。

式子内親王の面影びとは法然なのか、法然にとっての式子はどんな存在だったのかなど、恋愛感情だけに留まらず、いろんな角度から二人を見る、時代をみる、環境から考察してみる、式子が詠んだ歌を感じる…と盛りだくさんの会となりました。

（文責：森下）

『式子内親王伝　面影びとは法然』を読んで

◆【　K子　】

石丸晶子さんが 7 年間もかけて式子内親王について書きあげたのは彼女に深掘りする材料がそれだけあった（？）ということですかネ！

式子内親王

後白河天皇の第 3 皇女（父にとても愛されていたらしい）母方は美形の血筋。彼女もそうであった。（この当時の美の基準は現在とは異なると思いますが…）美形であったことが少なからず式子の生涯に影響をしていることもあったようです。賀茂斎院の宣下を受けて 10 年間，賀茂神社に奉仕しました。（恋愛も結婚もだめと言う縛りあり）二重，三重の御簾の中で成長して一流の歌人になったには本人の資質

プラス御付の力も大きかったことでしょう。病により退下しその後は住まいを転々としました。色々な事件にもまきこまれ病状が悪化して 53 歳で死去。これまでの間に父に出家を願い出るが許されず。なぜならば出家のときの導師が法然であったからのようです。でも決行。法号は，承如法あるいは正如房となる。その後父崩御。

法然登場

　彼は名家の出で僧になったのではなく父母がある事で殺される。一人息子であった為生きる術として仏門に入る。その才たるや延暦寺の高僧にまで登りつめたが思うところあって自分の道を説いていく。この時に式子と「十八道」の講義を受ける中で知り合う。式子は法然に強くひかれていく。この過程で彼女の和歌がどんどん恋の歌に変化していく。慕情そして尊敬している法然に出家の道をたくす。法然の心が，式子が思う程にあったかどうかは…？法然は生涯独身。石丸晶子さんが「面影人」と銘打ったのではと思うふしもありませんか？

　この本によると定家と式子の恋仲説はどうもと言う感あり。帳の中のことかな？でも明月記に定家が式子の様子を再三記していますし…。いずれにせよ 600 年前を抉じ開け様とした石丸晶子さんはすごい！！

◆【 TK 】

　わたくしの苦手な読み物でした。日本の昔の時代についてでした。漢字の読み方も背景も人間関係も把握できないのです。

　日本の皇室の昔の人の短歌をつくった人についてです。

　皇室　祭事　和歌を歌う

今も昔も変わりません。

　今の皇室の方が裕福ながらも自由の無い世界を生きたのでした。それを白い歳月と表現されていました

　短歌とひそかな恋愛がただ自己表現となったのでしょうか。

◆【 T 】

　読書会の課題図書になったから手に取って読んだ本です。今まで読もうとしたことがない傾向の本だったが、普段読めない本がこうやって読めるのも読書会の良いところだと思う。

　和歌とか宮中の話とかについては、なじみが薄い分野なので、読み通すことができるか心配もあったが、昨年の大河ドラマ「鎌倉殿の 13 人」の登場人物や出来事とリンクしていて興

味深く読むことができた。後白河法皇・丹後局・後鳥羽上皇・九条兼実・平清盛・以仁王等がドラマに取り上げられると共に、以仁王の乱や、北条政子が娘のおお姫の縁談を進めるために京の丹後局と対面する話などもドラマにあり、それらの人物やエピソードが式子と深く関わっていたのが印象的だった。

式子が法然に手紙を書いて女房に託し、今生でのもう一度の対面を願ったが会う事はかなわなかった。しかし、ひたむきに自分の信じる道を突き進み教え を広めようとしている法然に出会ったことで、式子のそれまでの空虚な生活は一転したのではないだろうか。尊敬できる素晴らしい人に出会い、彼を慕う生活は苦しくもあるが、胸の中に心温まる思いも膨らんでいたと思う。

◆【 MM 】

今月の課題本は90を超えるタイトルの参考文献目録が示す通り情報量が多すぎて内容をつかむのが難しかった。著者は「式子が思い慕う人は法然」というゴールに向かって書き進めているように感じたが読み進めるにつれて私にはそうは思えなくなってきた。

式子内親王といえば小倉百人一首にある、

玉の緒よ絶えなば絶えねながらへば忍ぶることの弱りものぞする

（わたしの命よ、絶えてしまうというなら絶えてしまえ。生き長らえていたならば、秘めている力が弱って、秘めきれなくなるかもしれない）

恋の激情を詠んだこの和歌の印象が強い。しかしこの歌は「忍ぶ恋」というお題を与えられてそれに沿ってつくった歌である。恋の歌が式子の心そのままを表すというのはちょっと安直すぎやしないか。この歌の対象は誰だろうと想像するのは興味深いがそれは法然と言い切るのはちょっと行き過ぎじゃないかしら…。読んだ人の想像力をかきたてる歌を詠める才能は十分にあっただろうが。

式子は後白河天皇の第三皇女として生まれ、賀茂神社の斎院に卜定された。（1153生まれとすると7歳の頃。）十代を斎院として過ごし、1169年、17歳のとき病により斎院を退下。38歳で出家した。平安後期、結婚した皇女は3％に過ぎないと本の中であった。式子も独身であった。式子の出家に法然が関わっていた可能性があると著者はいう。呪詛の疑いをかけられたのも出家した年と重なる。法然と出会い、法然が式子に与えた影響は大きいだろうが、それが恋に直結しないのではないか。私が思ったのは式子にとって法然は心のよりどころだったのではないか、ということだ。式子が悩み苦しんでいるときに助言をくれたり（仏教の教えを説いてくれたり）、相談にのってくれる人物だったのではないか。

読書会に参加したときに思ったことは「式子が詠んだ和歌についてもっと深めてくれればよかった」ということだ。一週間で3冊の本にあたりそれらの本に載っている和歌が課題本の中にあるか調べていると一首の和歌が何回も出てくるところに興味をもった。

桐の葉も踏みわけ難く成にけり必ず人を待つとなけれど

（桐の落葉も、踏み分けにくいほどに深く積もってしまった。きっと来るに違いないと思って、人を待っているということではないのだけれど）

この歌は第一章（式子　その周辺）、第九章（切り岸に咲く）、第十章（現世への夢深く）、ふたたび式子と法然―あとがきにかえてと4回も出てくる。

第一章「ここに露呈しているのは、待っているというわけでは必ずしもないのだが、といいつつ、なおも待つ心を捨てきれぬ式子の心である」

第九章「あの方がきっといらしてくださるとは、必ずしも思っているわけではないけれど、というその心は、やはり待っていると思う。一つの面影が、桐の葉を踏み分け踏み分け、式子を目ざしてやってくることを」

第十章「晩年の、近づいてくる死のあし音をきくなかで詠出された歌からひびいてくるのは、いかにしてもあきらめきれぬ人を恋い、世を恋うこころであり、いかにしても仏道に帰依しきれず、そこを遊離してさまよう、救われがたきわが身をかなしむ心である」

あとがきにかえての章「式子も終生、法然との愛の成就を期待し待つ心を捨てきれなかったと思う」

「待っているという事はないのだけれど（待つ）」という一首からここまで広げることができるとは！後半になるにつれ著者の感情が走りすぎていないか。抜き出して並べてみると徐々に熱くなる胸の内（をもっていくる表現）が面白い。今月の課題本は時間をかけて丁寧に整理すれば新しいことが見えてくるかもしれない、と感じた本だった。